

『鎌倉地方の社寺における造園工事の歴史に関する研究』

一建長寺・永福寺・鶴岡八幡宮・長勝寿院・報恩寺について一

" Study of Construction Method in Old Garden in Kamakura"

The Construction History of *Kencho-ji* Garden, *Yohuku-ji* Garden, etc.

三 浦 彩 子

Ayako, MIURA

Abstract

I chose five temples in Kamakura city, and mentioned about the historic backgrounds of the time those gardens were constructed. I especially emphasize the unique topographies, emergence of *samurai*, and *Zen*. As the first step, I refer to documents about the construction of the garden, and consider of them with the civil engineering point of view.

As a result, the following points were made clear. One is that the *Kencho-ji* temple had realized the garden that was contrary to the main-stream methods of that period. They had managed to create several viewing-points in the narrow site. The other is that we can find several aspects between Kamakura garden and contemporary Kyoto garden such as "*karesansui*." And, finally, the *Kencho-ji* garden is the first example where the concept of classification of the space was applied, which was already common in architecture.

I had tried to capture the general ideas of how the conceptual aspects of Japanese zen garden was imported from China in this essay.

1. はじめに

本論文は、中世の鎌倉地方に造られた寺院庭園を取り上げ、当時の造園工事記録を通して、わが国の庭園史における鎌倉庭園の位置付けを試みる。鎌倉幕府の設置以降、都市の発達にともない、鎌倉五山をはじめとした数多くの寺院の建設が短期間に行われた。それらの建設は「谷戸の発達した地形」という地理的制約条件の中で境内環境の整備が行われ、それまでの京都などとは異なる技法が生まれたと考えられる。特に、巨大な中世寺院の勢力と武士階級の抬頭、そして当時としては大規模な土地造成といった状況の中で、庭園のあり方も大きな変革を迎えることとなった。

そこで、本論文では、当時の造営関係記事¹⁾を基に、中世鎌倉庭園がどのような経緯で造成されたのかを概観し、その後に京都で発達した禅宗庭園の思想の基礎がこの時期に形成されたことを明らかにする。

こうした中世鎌倉寺院については、これまでも幾つかの研究事例があり²⁾、伽藍の設計計画については櫻井敏雄「建長寺伽藍の設計計画について」、および網島淳「鎌倉の中世寺院境内環境と石切について」などがあるが、庭園史の視点に基づく検討はほとんどなされていないのが現状であった。筆者は、2000年度「土木史研究」において「鎌倉地方の史的庭園における築造技術に関する研究―建長寺方丈庭園の変遷について―」と題して、建長寺を対象とした鎌倉庭園の考察を試みたが、本研究では分析対象をさらに拡大して、その全体像を把握するものである。

なお本論文では、鎌倉の盛時から現在まで存続している建長寺および鶴岡八幡宮に加え、既に廃寺となった永福寺、長勝寿院、報恩寺の五つの社寺を研究対象とする。

2. 鎌倉の自然条件と中世寺院の立地

2.1 自然環境の特質

鎌倉の地形は、南方を相模湾に面して開き、東西と北の三方を海拔 100m 前後の低い丘陵地に閉ざされ、「天然の要害の地」とされてきた。地質学的には、主に新第三紀の泥岩層もしくは凝灰岩層が侵蝕されてできた谷内に、砂泥が堆積して形成された小規模な海岸平野である。そのため、周囲の丘陵の裾部には「谷」もしくは「谷戸」と呼ばれる小谷が縦横に入り組んでいる。

旧市街地は、直線距離で東西（小坪から稲村ヶ崎まで）が約 2.5km、南北（由比ヶ浜から鶴岡八幡宮まで）が約 1.8km であり、京都や奈良に比べ都市が成立するための面積は極めて限定されている。そのため源頼朝の入府（建久三年（1192））以降、鎌倉の都市の成立と発展にともない、周囲の丘陵の裾部を切り開いては低地を埋め、より多くの平坦地を造るという土地造成が繰り返された。山裾を切り崩した際の泥岩塊を当地方では土丹と通称しているが、この土丹を使用した整地盛土の痕跡は、発掘調査により旧市街地のほぼ全域にわたって確認されている³⁾。また、当地方で産出する鎌倉石⁴⁾と呼ばれる砂岩が土留などの土木材料として用いられていた事が知られている。

2.2 「武家の首都」としての都市形成と寺院立地

中世の鎌倉の都市は、三方を囲む山々のいたるところに、切岸^{註5)}や掘切^{註6)}といった軍勢の移動の阻止を目的とした防衛施設が整備され、軍事都市としての性格を強く現している。

『吾妻鏡』の記述によれば、仁治元年(1240)十月、北条泰時の命により、山内道路(小袋坂)の拡幅工事が行われ、その直後の十一月に「六浦道の工事」が議定されている。また、その後の建長二年(1250)四月、時頼によって「山内及び六浦道の再興」が行われたことから、小袋坂と六浦道は一对としての役割があったと指摘されている^{註7)}。すなわち鎌倉侵略の事態に備え、西北の自領(相模国山内荘)から、そして東北の金沢氏領(武蔵国六浦荘)からの応援といったように、自軍の往来が主な目的であった。また、泰時はこれらの道路工事とほぼ並行して名越坂の大切岸の設置を進めていた。小袋坂、六浦道および名越坂の三工事は、ともに敵方である三浦一族の鎌倉侵入を想定した防御施設でもあった。

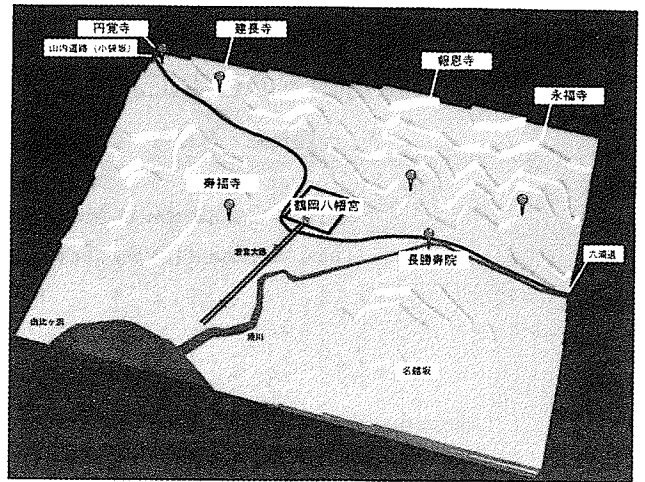
このように、小袋坂はもともと軍事目的で拡幅されたのであるが、その後、小袋坂の延長上に建長寺(建長五年(1253)建立)、円覚寺(弘安五年(1282)建立)など有力な寺院が次々と造営され、武士・職人の屋敷の建設も進められ、諸人の交通路としても利用されることとなった。十三世紀の前半において、山内は鎌倉中ではなく^{註8)}、西北の入口として中世鎌倉の境界部分にあたるが、一般にこうした部分は、葬送の場であり、また刑場や市場のたつところであるとされる^{註9)}。また、境界という立地は都市の防衛という面において重要であり、寺院を境界に建て都市を守る役割を果たしたとされる^{註10)}。実際に、円覚寺の境内領域の西端に簀屋が設けられていた記録^{註11)}からも、その性格が現れていると言える。

また六浦道沿いには、杉本寺や荏柄天神といった古代以来の寺社が建ち、鎌倉の外港である六浦とを結び、鎌倉の都市の基軸線となっていた。

中世鎌倉の都市計画について、その全体像は未解明であるが、京都の条坊制のような整然とした都市計画が成立したとは考えられていない。近年の研究^{註12)}によれば、「十三世紀中葉にかけての都市整備が、道路を軸になされ^{註13)}、しかも鎌倉の街のなかでも方格地割りのなな中核部と、頼朝時代以来の「号=郷」的な周辺部との、二重性をもっていた可能性が考えられる」とされる。本論文で取り上げる五つの社寺については、中核部の鶴岡八幡宮を除いて、他の四例は全て丘陵の周縁部に立地している。(【図-1】)

2.3 中世鎌倉の寺院と土木技術

鎌倉市域には、現在、100以上の寺院が存在するが、盛時にはその倍以上も存在していたと言われている^{註14)}。往時の様子は、小寺院から將軍造営による大寺院、五山の大伽藍にいたるまで、ほとんどが谷戸地形内に配置され、特徴的な都市景観を形成していたと想像される。



【図-1】「中世鎌倉都市と社寺関係図」

特に市域の丘陵部には、幅が狭く深い奥行き谷戸地形が随所に発達し、五山第一位の建長寺(建長五年(1253)建立)や、第二位の円覚寺(弘安五年(1282)建立)のように、一寺院が一つの谷を占地している光景が見られる。このように谷戸の奥行きが境内の配置に積極的に生かされたのは、建長寺以後と考えられており^{註15)}、中国大陸から縦列的な構成をとる禅宗伽藍が導入され、建長寺において最初に適用されたことによるものである^{註16)}。しかし、鎌倉寺院における谷戸造成の実例はそれ以前に遡ることができる。例えば、源頼朝が造営した鶴岡八幡宮(治承四年(1180)建立)、勝長寿院(文治元年(1185)建立)、永福寺(建久三年(1192)建立)の三寺院にはじまり、寺院造営の際に狭い谷戸内に寺地を確保するために、岩盤を切り開いて境内を造成する手法が用いられた。

勝長寿院境内に関しては、谷筋の発掘調査の結果、山裾の部分に岩盤が残っており、その前面(谷頭に近い部分)が埋立地となっていたことが報告されている。丘陵部の地質である凝灰岩は比較的柔らかい岩石であったため、当地域においては、こうした土木作業が比較的容易に繰り返された。現在でも、谷の両側や谷奥には階段状の地形を持つ場所が多く見られ、現地表面から鎌倉時代の初期の地表面までの間には、こうした人為的な地業層が数層にわたって存在している。

谷戸を削って造った平坦面を「平場」というが、このような谷戸の埋立てについては、具体的な調査報告例^{註17)}があるが、その全体像についてはまだ十分に把握されていない。

また、『吾妻鏡』や『空華日用工夫略集』^{註18)}に代表される中世五山文学中の創建にまつわる記述から、土木事業の工程を具体的に推定することも可能である(後述「4.5 報恩寺」の項参照)。

このような中世鎌倉寺院の境内築成において、「石切」^{註19)}と呼ばれる作業工程が重要な役割を果たしていた。鎌倉には石切場は数多くあるが、壽福寺の背後の山は鎌倉石を切り出したので石切山と名付けられている。初期の段階における「石切」は、切通しの開削や平場の造成

など土木的役割が強かったと考えられるが、その存在は鎌倉地域において作庭技術を受容するための技術的準備をなしたと考えられる。

3. 鎌倉以前における中世寺院と庭園

3.1 浄土思想に基づく庭園

平安朝の四百年間における文化の指導的役割を果たしたのは公卿や貴族たちであり、華麗な庭園様式が発達した。これはいわゆる浄土式庭園と呼ばれるものであり、仏教の浄土思想を基とし、また末法思想にも大きく影響されて、平安時代中期以降に盛んに造られるようになった池庭の一つの形式をいう。その特徴は、建物の南に広大な池をつくり、中島に反橋をかけ、池の中で舟遊に興じたとされる。京都の貴族社会で発達したこの浄土信仰は、東北地方にも広がり、宇治の平等院（1053）建立からおよそ五十年後に平泉に中尊寺や毛越寺が建立された。鎌倉時代、関東地方における浄土式庭園としては、永福寺（1189 年着手、後述「4.3 永福寺」の項参照）、願成就院（1189 年造営、所在／静岡県菰山町）、大慈寺（1212 年造営、所在／鎌倉市大倉）の三庭園などがあり、いずれも平泉文化の影響を受けたとされる。

3.2 鎌倉武士の抬頭と庭園

鎌倉時代に入ると、政治の中心は鎌倉に移るが、依然として文化の中心は京都であった。しかし、武士階級の抬頭により財力をなした武将たちは、次第に作庭趣味をもつようになる。源頼朝は自ら造営した永福寺の庭園の造成に直接指示を与えており、指導的役割を果たし始める様子が窺える（後述「4.3 永福寺」の項参照）。

そのほかにも、鎌倉の谷間には、鎌倉時代の武将が営んだと伝えられる居宅跡に庭園らしい地形が見ついている。また、『吾妻鏡』によると正治元年（1199）に大江広元が亭後の山麓に新家屋を造営し、山水立石を行ったという記述がある。さらに、建長二年（1250）北条時頼が鎌倉幕府の北の小庭に石を立ててみたいとの由の希望があり、阿弥陀堂の加賀法印定清が召し出され、武藤武頼という武将がその奉行を勤めたと記されている^{註20}。

室町時代に入ると、庭園趣味は足利將軍を中心とした京都在住の武将に引き継がれ、数々の名園を生み出して日本庭園の全盛時代を迎えることとなる。

3.3 禅宗思想の導入と鎌倉庭園

禅宗は、鎌倉時代に南宋時代の中国からもたらされ、禅宗思想に基づいた寺院の建設が始まった。建長寺はその最初の創建寺院である。当時、盛んに両国の文化交流が行われ、高僧などによって禅文化がもちこまれたが、中国禅院の庭園様式がそのまま鎌倉に移入されることはなかった。すなわち、中国の禅宗五山においては伽藍の正面に大きな方形の池（放生池）をつくる例が多いが、

最初の建長寺では実現されなかった（後述「4.4 建長寺」の項参照）。

さらに、禅理を主題とした庭の意匠が発生したのは、室町時代である。室町時代は、禅思想があらゆる文化に浸透した時期であり、禅院の盛況と共に禅庭も流行した。中でも枯山水庭は、禅理が背景となっはじめて可能となった様式であった。従って、鎌倉においては禅理に基づく作庭は行われなかったが、禅宗と庭がはじめてこの地で結びつきを持ったと言える。

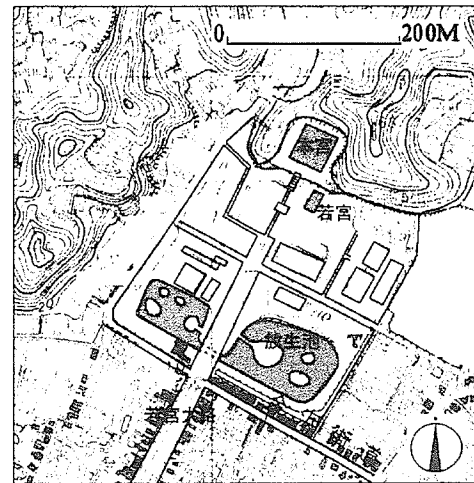
4. 中世鎌倉における寺地造成と造園

この章では鎌倉時代における創建の記録が残っている五つの社寺について、当時の工事の様子を概観する。ここで取り上げる五つの社寺は、いずれも谷戸と深く結びついて立地し、鶴岡八幡宮・永福寺・建長寺・報恩寺については庭園が存在した。また長勝寿院は、庭園は造成されなかったが、鎌倉の谷戸に占地した最初の事例であるため、研究対象としてとりあげた。

鎌倉寺院の全体図は、頼朝の時代、鶴岡八幡宮が中心に据えられ、そして永福寺、長勝寿院、それよりあとに寿福寺（五山三位）などが市域内に建てられた。それから間もなくして小袋坂の延長上に建長寺が建てられ、しばらくのちに報恩寺の創建と続いた。

4.1 鶴岡八幡宮

治承四年（1180）創建〔表-1〕〔図-2〕（所在／雪ノ下）



〔図-2〕

鶴岡八幡宮は、治承四年（1180）に鎌倉入りした源頼朝が長勝寿院、永福寺とともに鎌倉に創建した三大社寺の首座である。宮内は高低二段からなり、上段に本宮（上宮）、下段に若宮（下宮）が配され、石段によって結ばれる。

現在、由比ヶ浜からのびる直線の参道（若宮大路）は、養和二年（1182）三月十五日に造成された。宮寺の前には放生池があり、もとは水田であった地を池に改め造成

表-1 鶴岡八幡宮／造成工事略日誌（「吾妻鏡」をもとに作成）

（作成：三浦）

年号	年	月	日	工事と儀式	条文（読み下し）	備考
治承	1180	10	7	鶴岡を遷す	鶴岡八幡宮を遷す。次に故左典廐の 亀谷の御舊跡を監臨したまふ。すなはち當所を點じて御 亭を建てらるべきの由、その沙汰ありといへども、地形 廣きにあらず	(左典廐＝源義朝)
			10	12 鶴岡宮を遷す	祖宗を崇めんがために、小林郷の北山を點じて宮廟を構 へ、鶴岡宮をこの所に遷してたてまつらる	
養和	1181	12	16	若宮鳥居を立つ	鶴岡若宮に鳥居を立てらる	(鶴岡＝鶴岡)
		5	13	若宮の造営を始める	鶴岡若宮造営のために、材木の事その沙汰あり	
		6	27	若宮建築資材届く	鶴岡若宮の材木、柱十三本、虹梁二支、今朝旦由比の浦 に著く由これを申す	
		7	3	浅草の大工を召す	若宮造営の事、その沙汰あり しかるに鎌倉中において、然るべきの工匠なし よって武蔵國浅草の大工宇郷司を召し進すべき旨、 御書をかの所の沙汰人等の中に下さる	
	1182	7	8	若宮を仮殿に移す	浅草の大工参上するの間、若宮の造営を始めらる まづ神體を仮殿に遷したてまつる	
		7	20	若宮上棟	鶴岡若宮の寶殿上棟す	
		8	15	若宮遷宮	鶴岡若宮遷宮	
		3	15	鶴岡社の参道を造る	鶴岡の社頭より由比の浦に至るまで、曲横を直して詣往 の道を造る	
		4	24	鶴岡若宮邊の田を 池に改む	鶴岡若宮の邊の水田三町余、耕作の儀を停められ、池に 改めらる	

表-2 長勝寿院／造営工事略日誌（「吾妻鏡」をもとに作成）

（作成：三浦）

年号	年	月	日	工事と儀式	条文（読み下し）	備考
元暦	1184	11	26	頼朝父のために 一寺建立を企つ 地曳始	武衛、伽藍を草創せんが為、鎌倉中の勝地を求め給ふ 營の東南に當りて、一の靈岩あり 仍て梵宇の造作を被所に企てらる これ父徳に報謝するの素願なり	(武衛＝源頼朝)
文治	1185	2	12		伊豆に材木を求め	
		2	19		事始	
		4	11		立柱	
正嘉	1258	4	19	三重塔・一切経蔵上棟	長勝寿院の三重塔・一切経蔵等上棟す	
		4	25	塔に九輪を上げ	長勝寿院の塔に九輪を上げ	
		4	26		長勝寿院ならびに諸堂等、棟を覆む	

表-3 永福寺／造成工事略日誌（「吾妻鏡」をもとに作成）

（作成：三浦）

年号	年	月	日	工事と儀式	条文（読み下し）	備考
文治 建久	1189	12	9	永福寺造営の事始	今日永福寺の事始なり	石立僧「静玄」
	1192	6	13	頼朝永福寺造営 工事を観る	幕下、新造御堂の地に渡御す	
建永	1207	8	24	池を掘る	二階堂の地に始めて池を掘らる 地形もとより水木相應の所なり	
		8	27	池の立石を相談す	阿波阿闍梨静空の弟子静玄を召し、 堂前の池の立石の事仰せ合わせらると云々	
		9	11	池の石を立つ	静玄、堂前の池に石を立つ 將軍家、昨日より行政が宅に御逗留 この事を覽んがためなり 汀野の埋石、金沼汀野筋、鶴岡石島等の石、ことごとく もつて今日これを立て終る 沼石ならびに形石等に至りては、一丈ばかりなり 静玄が訓をもつて、畠山次郎重忠一人これを捧げ持ち、 池の中心を渡り行きてこれを立て置く 観る者その力に感ぜずといふことなしと云々	
		11	13	池石を置き直す	二階堂の池の奇石の事、なお御氣色を背く事等相交はる の間、静玄を召し、重ねてこれを直さる	
		11	20	竣工	永福寺の造作すでにその功を終ふ	
		11	27	薬師堂供養	薬師堂供養なり、將軍家寺内に渡御す	
		3	1	永福寺より北壺に櫻・ 梅を移植す	櫻・梅等の樹、多く北の御壺に植えらる 永福寺より引き移さるるところなり	
		12	22	實朝、長勝寿院 永福寺に詣づ	將軍家、長勝寿院・永福寺等に御参 これ歳末の恒規なりと云々	
		3	9	實朝永福寺に櫻観賞	將軍家にはかに永福寺に御出 櫻の花を御覧せんがためなり	
		3	10	實朝永福寺に櫻観賞	將軍家櫻花を覽んがために永福寺に御出（中略） 次に花林の下に逍遙したまふ（中略）和歌の御會あり	

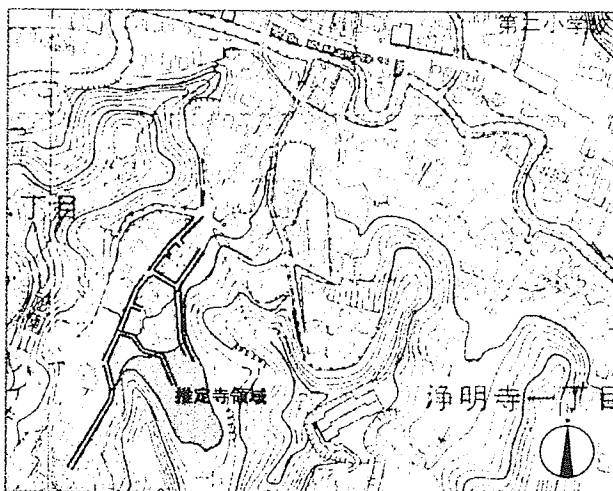
されたことが『吾妻鏡』に記載されている（同年四月二十四日条文）。現在、東池を源氏池、西池を平家池と呼ぶのは、江戸時代に入ってからのものである。現在の池面積は約 11920 m²である。

頼朝が鶴岡八幡宮を築いたのは、先祖頼義が由比に鎮座した八幡宮を現在の地へ遷宮したもので、同年十月十二日に若宮創建、建久二年（1191）十一月二日に本宮が創建された。この本宮の建設は、平氏を討滅し、奥州藤原氏を倒して、時の最大勢力となった武家社会の幕開けを告げる記念すべき事業であった。先に建った若宮の背後にある大臣山の中腹を大きく削平することとなったが、材質が柔らかい鎌倉石であるため、さほど難工事ではなかったと考えられる。しかし、当時の技術水準を考えるならば相当な大事業であったと想定される。

鶴岡八幡宮の宮前の池の造成は、若宮大路の造成とほぼ同時期に行われ、中世鎌倉都市の骨格形成に深く関係しており、重要な意味をもっていたと考えられる。池の造成に関する詳細な経緯は不明であるが、その規模は広大で浄土式庭園に匹敵するものであったと思われる。

4.2 長勝寿院

文治元年（1185）創建【表-2】【図-3】（所在／雪ノ下大御堂）



【図-3】

長勝寿院は、源頼朝が父義朝をとむらうために建てた源氏の菩提寺であり、谷戸に占地した最初の寺院であった。すでに廃寺となり、現在まで全体的な発掘はなされていないが、『吾妻鏡』の記述から創建時の建築規模を推定することができる。

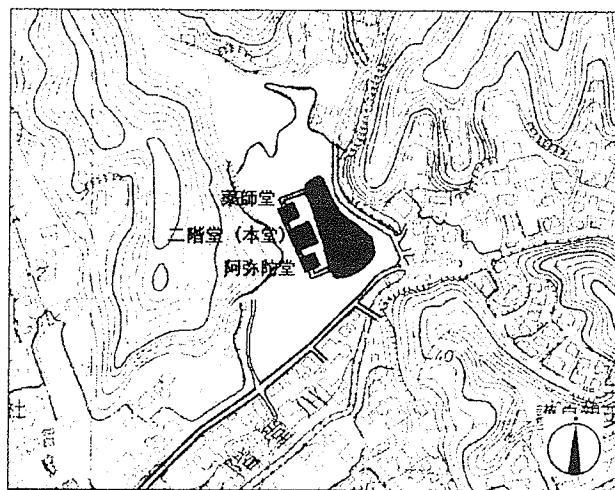
それによれば、元暦元年（1184）十一月二十六日、頼朝みずから選定した地に臨んで地曳始の儀が行われた。条文中、寺地を霊岩と表現している点に注目されるが、石に対する特別な表現は別の文献中にも確認される²¹⁾。文治元年（1185）二月十二日、伊豆に材木を求め、十九日事始。四月十一日立柱。五月二日、左馬頭能保を伴い、工事を見ながら堂舎の配置を相談した。この日、仏像を造るために招かれた奈良仏師成朝が参向し、八月二

三日には下総権守為久が壁画などを描くために参着した。鎌倉に文化的伝統がなかったために中央文化を盛んに移植していた様子が窺い知れるが²²⁾、長勝寿院はその最初の事例であった。

現地では、部分的な発掘により、直径 70-80cm もある非常に大きな礎石が発見されている。推測される柱径は 40-50cm にもおよび、大きな本堂建築が存在していたことを裏付けている。そして、中央文化への傾倒から判断して、京都にモデルがあってそれを模したであろうと推察されている²³⁾。

4.3 永福寺

建久三年（1192）創建【表-3】【図-4】（所在／二階堂）



【図-4】

永福寺は、源頼朝が戦乱による死者の供養を目的として建立したもので、その寺観は奥州征伐の際に頼朝が見た平泉の大長寿院を模したとされる。応永十二年（1405）の火災以後廃寺となったが、近年の発掘調査²⁴⁾により伽藍の全容がほぼ明らかとなっている。

伽藍は西側の山裾を背にして東面し、現在も地名として残る二階堂と呼ばれる本堂を中心に、北に薬師堂、南に阿弥陀堂が建ち、3 棟の建物は翼廊によって接続された。そして、堂前面には広大な苑池から成る浄土式庭園が築造された。こうした構成は、平泉の毛越寺や京都の平等院に共通しているが、池が堂の東前面から山裾まで谷一杯を使って造成されている点において、解放された前面を持つ毛越寺や平等院と立地条件が明確に異なっている。

現在は、東西 200m、南北 400m ほどの長方形に近い平地となっており、これは谷ふところに造られた人為的な平地と思われる。昭和五八年（1983）の鎌倉市教育委員会による発掘調査の際、削平された岩盤が発見されているほか、後方の山肌も人工的に削ったような岩崖であることから、造営において岩盤を開削する工事がなされたと考えられる。さらに、池を造るにあたっては凹地を造成するだけでなく、水が漏れないように底面に土丹を

敷いてつき固め不透水層としていた（後の改修に際しては底面の貼り増しもなされる）ことも調査によって確認された。池の深さは時代によって異なるが数十cm程度で、池に水を引いていたのは三堂背後からの排水溝も考えられるが、北翼廊東端近くと端部に二筋の水路が発見された。また、池の調査が進むなかで、本堂前面に橋が架けられていたことも判明した。この橋は橋脚跡から幅二間（4.8m）、長さ五間（26.5m）の巨大な木橋であったと推定されている^{註25)}。

『吾妻鏡』の記述によると、頼朝は文治五年（1189）に永福寺建立を思い立てから、鎌倉内の適地を捜させて現在の谷地を用地として選んだ。また屋島の立石についても工事を毎日のように見に行き池に立つ石の位置を指図している様子が記されている（建久三年十一月十三日条文）。ここには、石立僧として「静玄」の名前が登場しているが（同年九月十一日条文）、この人物の実際の作庭歴は不明ながら、作庭秘伝書『山水並野形図』中の系図に登場していることから、京都仁和寺系の僧であろうと考えられている^{註26)}。こうした点からも京都庭園文化を積極的に取り入れていた姿勢を読み取ることができる。

永福寺伽藍は、三浄土を苑池に向かい東向きに並べ翼廊でつなぐという、庭園を中心にして浄土世界を具体化したものであったが、三方を低い山に囲まれるという地理的制約により、苑池は南北に細長いものとなった。永福寺庭園は、平泉文化の波及を基本としながらも、中世鎌倉の創意を加えたものであったと思われる。

建長寺は、中国からの渡来僧である蘭溪道隆により建長五年（1253）に創建された臨済宗建長寺派の大本山で、鎌倉五山第一位を占める。

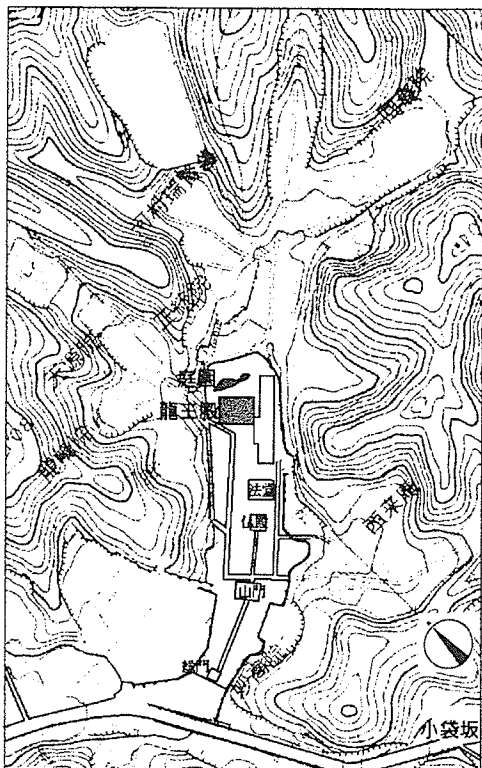
境内地は、南西―北東方向の谷地形にあり、伽藍が縦列に並ぶ様は中国の禅宗寺院の様式をそのまま移入したものである。谷奥にはさらに支谷が広がり、多くの塔頭寺院が設けられた。伽藍の中心部の標高は約38mで奥の庭園部では標高41mとなっており徐々に高まっている。庭園は、低い丘陵を背にした池泉鑑賞式で、山裾から池辺の築山にかけて多種の木々が植栽されている。

伽藍は、その後の災害などによって度々再建されており、建長・建治の創建期、永仁・正和炎上後より南北朝にいたる最盛期、応永・長祿炎上を経た室町後期の衰退期、寛永末・正保年間の江戸初期復興期、宝暦・明和年間の方丈再建と庭園整備をおこなった江戸後期復興期に分けられる。

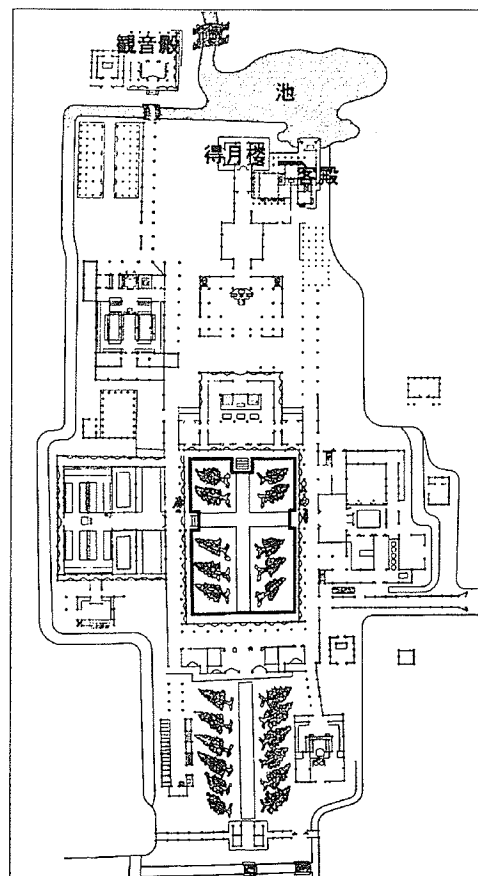
最盛期における伽藍の様子は、元弘元年（1331）に描かれた『境内指図』（[図-6] 参照）により詳細に把握することができる。伽藍後方の広大な苑池は蘸碧池と呼ばれるもので、この池のことは『元亨釈書』など鎌倉時代の文献に出てくることから創建時期の開墾とみられる。池に面する建築は、客殿および得月楼・観音殿と記された二階建ての楼阁形式である。客殿は住持の公的な接客を目的として設けられるものであるが、指図によれば、池に廊が張り出して寝殿造風の住宅建築であることがわかる。これら建築群は池の鑑賞を意図した造作と配置になっているが、このあたりの景観は同時代の中

4.4 建長寺

建長五年（1253）創建 [表-4] [図-5、6]（所在／山内）



【図-5】



【図-6】

国江南地方の園林²⁷⁾に共通したものである。指図には池にかかる二つの反橋が描かれているが、橋に関しては、『空華日用工夫略集』に「天津橋新たに成り、観る者市の如し。」（応安元年（1368）七月五日条文）とある。これは後に、橋の左右に偈をかけたことから（応安二年（1367）五月二十日条文）、廊橋の可能性があるとされ²⁸⁾、南北朝末期には蘸碧池を中心に豊かな景観をなしていたことが想像される。

指図と現状の実測図との比較を行うと、池泉の規模と形に変化がみられる。これは、江戸後期に大規模な庭園改造工事を行ったことによるものである（後述「5.2 江戸時代の建長寺庭園整備」の項参照）。最近の部分的な発掘によると、鎌倉時代における池泉の護岸の一部が発見されており、かつて広大であった池の存在を裏づけて

いる。また現在の庭園池底部において、鎌倉時代の工法とされる植土を敷き詰めた工法が確認されており、現在の池も鎌倉遺構の一部であったと考えられる²⁹⁾。

指図には、総門から仏殿に至る参道にそって大木（柏楨）が左右対称に描かれており、宋風禅刹前庭の様式が確認される。左右対称で整然とした構成をとる伽藍中心部（公的空間）とは反対に、最奥部の池と客殿（私的空間）は非対照に配置され、異なる空間を構成していることが注目される。

さらに、建長寺庭園の造られた時期と伽藍完成経緯との関係性に注目すると、禅院の公務をなす伽藍中心部が完備されたのは建政七年（1276）であり、その後に伽藍後方の私的空間の造営に着手したと仮定するならば、その造作には、主の趣向にそって自由な創作がなされた可

表-4 建長寺／造成工事略日誌（「吾妻鏡」「日工集」をもとに作成）

（作成：三浦）

年号	年	月	日	工事と儀式	条文（読み下し）	備考
建長	1251	11	8	事始め	事始あり	「吾妻鏡」引用
	1253	11	25	仏殿落成	建長寺の供養なり 丈六の地藏菩薩をもって中尊となし	
建政 元弘 応安	1276			伽藍完備	天津橋新に成り、観る者市の如し 天津橋新に成り、但だ恨むらくは境有て人無きことを 人境兼備するは両和尚に非ずして誰ぞや 請ふ、一覽亭の例により偈を作りて橋の左右に掲げんことを、千載の嘉話ならん	「日工集」引用
	1331			境内指図描かれる		
	1367	7	5	天津橋新成		
	1368	5	20			

表-5 建長寺／造園土木工事略日誌（「龍王殿再建日記」をもとに作成）

（出典：文献29）

年号	年	月	日	工事と儀式	条文（読み下し）	備考
宝暦	1754	2	8	池縮小に同意を求む	宝珠庵下之畑どて土取始方丈地形之初候故四方鎮守	再建の儀式 (1751年6月20日)
		2	18		方丈之裏陝二付和尚方へ御内意を窺蘸碧池六尺通埋事	
		2	24		宝珠庵下土手土取相済	
		2	26		新堀筋縄張和尚方御見分相済	
		2	28		諸役者方丈二会新堀渡之相談広サ五尺長サ九拾貳間 深サ水流候様二致	
		3	28	土木施工開始	新堀石垣築始崩石を以両側十間余	
		4	19		本石二而宝珠庵下より築始	
		5	19		新堀土取掛	
		5	21		石屋築半掛	
		5	26		大工三左衛門方丈地図書始	
		6	5		新堀之土方丈庭并唐門外江運	
		6	6		此日より築山ノ大楸共伐始	
		6	17		諸職人來入	
		6	26		蘸碧池より之水送成 正統庵敷之内新堀開宝珠下堀筋土運了	
		8	5		方丈腰土手築	
		8	14		土手築了	
		8	28	雨による石垣崩壊	大雨池ノ西方土手石垣共二三間余崩	
		9	2		寺中人足兩人例ノ崩石ヲ出七日大雨又石垣六間程崩	
		9	24		石匠ヲ入人足ヲ入堀土手崩築了	
		11	4		新堀石垣之管人足にて芽を以編之	
	1755	2	20	石垣床固め	方丈裏紅葉之木植替	建築施工開始に至る までの土木施工に
	1756	1	11	方丈建設着手	方丈於広庭大工棟梁三左衛門新始之式取行	約2年間経過した

表-6 建長寺／庭園整備工事略日誌（「建長寺参暇日記」をもとに作成）

（出典：文献29）

明和	1769	3	7	築山の修築に着手	方丈築山の修築を始め	
		4	10	庭開	此日方丈築山茂出来上り候故、右庭開を相兼中食赤飯等 為致、山中不残芝居へ参ル、金貳百足為祝儀雪下若者共 へ遣候、即夜於方丈和尚方并諸役役者打寄築山沙汰（不 明）振舞候	
		4	11		同十一日宗庭方へ為礼銀子貳枚	

庭師「宗庭」

能性が考えられる。このことが、元弘元年（1331）の『境内指図』に確認されるように、池周辺の意匠が中国江南地方の園林庭園に近いと指摘される^{註30)} 所以であろう。ちなみに、蘭溪道隆は日本に渡る以前に中国江南の蘇州の地で禅を学んだ経歴がある。とりわけ園林が蘇州で発達した庭園様式であることから推測して、蘭溪道隆が建長寺の作庭に関わった可能性も考えられるが、事実を裏づける史料は現在まで発見されていない。

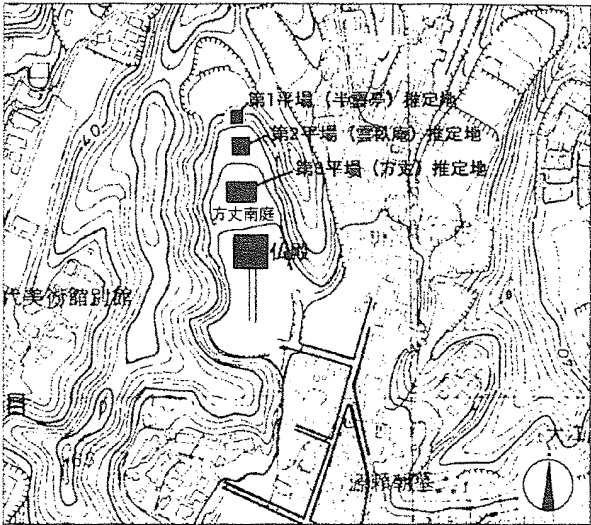
本来、禅宗寺院と園林とは、まったく異なった性質のもので、それらが敷地の前方と後方に同時に存在することは、意をなさないものであるが、これを具体化したことに、建長寺庭園の特異性があると考えられる。

4.5 報恩寺

応安四年（1371）創建〔表-7〕〔図-7〕（所在／西御門）

報恩寺は、開山義堂周信^{註32)}（1325～1388）により応安四年（1371）に創建された禅宗寺院である。当寺の名称は永享年間（1440 年頃）の『黄梅院文書』などの歴史史料^{註33)} の中に登場しているが、その後、数度の被災により今日では旧跡を残すのみとなった。しかし、昭和四九年（1974）から始まった発掘調査によって中世遺構の所在が推定されている^{註34)}。

義堂周信によって書かれた『空華日用工夫略集』の内容^{註35)} によれば、応安四年（1371）、「創一刹於鎌倉城北、名曰報恩護国、山称南陽、關基演唱訖」（十月十五日条文）とあるように、鎌倉の城北（すなわち鶴岡八幡宮僧坊と山一つ隔てた、西御門の一谷戸）が適所に選ばれた。さらに同日の記述「余先試把鑿、開土三下、入簣中



〔図-7〕

而後、与檀那運搬一次」からは、義堂本人が早速、鑿（くわ）をもって開墾に入っている様子がうかがえる。さらに「入簣中」とあるように、担ぎ棒に下げる土砂運搬用の簣（モッコ）を使用していたことも記されている。これは土丹による境内の盛土工事に使われたもので、八幡宮の造営（治承四年（1180））において使用された竹ザルと同種のものと考えられる^{註36)}。また、十月十八日に、衆に対して「古人に「且つ耕し且つ戦ふ」の語有り。今我這裡且つ土木し且つ行道す。是れ所謂耕戦なり。」と説いている。この中の「行道」とは、土木に従事したりまた修業する意^{註37)} とされる。

それより七日後に「方丈立柱上棟」が行われ、次第に境内地の整備が整ってくる。さらに、「余往報恩寺視土

表-7 報恩寺／造営工事略日誌（『日工集』をもとに作成）（作成：三浦）

年号	年	月	日	工事と儀式	条文	備考
応安	1371	10	15	草創	余応上杉兵部種公誦、創一刹於鎌倉城北、名曰報恩護国山称南陽、關基演唱訖、余先試把鑿、開土三下、入簣中而後、与檀那運搬一次	『空華集』註31) 引用
			18	衆に土木の意を詠ず	衆為説云、古人有且耕且戰之語、今我這裡、且土木且行道、是所謂耕戰也	
		10	21	方丈建立着手	報恩方丈立柱上棟	
		11	15	建材盜難	昨夜報恩寺有偷材之人	
	1372	2	10	土木工事を視察	余往報恩寺視土木、或人勸曰、遍于諸方園中、取珍木異石、為泉水之備、不日必成榮觀、余却之曰、樹石等物、人々自植、以充珍玩、而取之、謂之豪奪、余暫不欲取入所畜、但以莖樹村花、隨得隨移則足矣	
				庭園等の境地造営について指示を与える		
		6	15	報恩寺に遷居	余遷居報恩新寺	
				土を運び垣を築く	普請搬土築塙	
				方丈南に竹植える	既方丈先成、種竹於南軒者數莖扁日繁竹而居焉	
		10	16	庫司建立延期	檀那兵部家臣紀吾來、和會報恩寺材料油庫司基處、余日庫司固合建立、然古人不以食為先、故余不欲先立焉	
		11	15	後山に用地開削	新開荒於報恩方丈後山、名曰雲臥庵	
		12	13	雲臥庵の礎を立つ	雲臥庵立礎	
1373	10	1	報恩新寺未有僧堂			
		6	半雲亭を雲臥庵上面に造る	造小亭於雲臥庵上面 名曰半雲		
永和	1374	4	11	仏殿開基	新寺普請、關仏殿基	
	1376	11	13	仏殿立柱	報恩寺仏殿立柱	
	1378	6	25	塔庵をつくる	房州承先兵部敬堂遺命、以旧第婦報恩為塔庵	
			10	17	塔庵完成	報恩寺敬堂塔庵既成矣

木、或人勸曰、遍于諸方園中、取珍木異石、為泉水之備、不日必成榮觀、余却之曰、樹石等物、人々自植、以充珍玩、而取之、謂之豪華、余誓不欲取入所畜、但以埜樹村花、隨得隨移則足矣」（応安五年二月十日条文）とあるように、土木工事の視察を行っているが、珍木名石を取り寄せ豪華にするのではなく、自然のあるがままの趣を尊重したいとする作庭の意志が表れている。六月十五日には、当寺に遷居し、方丈の南軒に竹を植え「撃竹」と名づけている。

境内は中心軸線上に主要建物を配する禅宗様式を採用したが、『空華日用工夫略集』から寺内造成の年代を追ってみると、まず方丈を建て、その後山の荒地を開いて雲臥庵を建て（応安五年十一月十五日条文）、さらに雲臥庵の「上面」に半雲亭を各々建てている（応安六年月六日条文）。このような幾度にわたる造成工事により、報恩寺跡の谷戸は最奥部から五段に亘る階段状の平場によって構成されることとなった。このうち雲臥庵（第2平場）と半雲亭（第1平場）間、および雲臥庵（第2平場）と方丈（第3平場）間は各々5m以上の比高差あり、谷戸地形と深く結びついた境内環境を構成している。

報恩寺の庭園は、造営の初期の段階で計画され、方丈という私的空間に付属していた点に注目される。そこで目指した庭園像とは、自然の情景を生かした姿であった。

5. 寺院の再興と造園事業

5.1 鎌倉時代以降の鎌倉庭園

幕府滅亡後、鎌倉の禅宗寺院は相次ぐ火災や、遠隔地寺領の退転により、次第に衰退しかつての盛観を失った。しかし、江戸時代になると徳川幕府による鎌倉寺院の復興事業が始まり、中でも徳川秀忠による鶴岡八幡宮の造替がその最大規模とされる。江戸時代の全期間を通して復興の努力がなされ、その一環として庭園の再整備も進められた。その一例として、ここでは建長寺を取り上げ、どのように整備されたのかを当時の記録に基づいて概観する。

5.2 江戸時代の建長寺庭園整備

建長寺庭園の整備は、方丈（龍王殿）の再建事業にともない宝暦四年（1754）より始まった。その整備事業の内容は大きく二期に分けられる。

前期は、池の埋め立てや石垣築造といった敷地造成を主としており、造園土木工事に相当する（[表-5] 参照）。その工事の様子は、『龍王殿再建日記』^{註38)}に具体的な記述が見られる。

後期は、明和年間（1769年頃）に行われ、築山の修築など庭園の造作に細かく手が入れた。そして庭師「宗庭」という人物が行ったことが『建長寺参暇日記』^{註39)}に記されている（[表-6] 参照）。今日の建長寺庭園の景観は、おそらく明和の改修時期の姿をとどめたも

のであると推測される。

ここで前期の庭園整備について詳しく見ると、たとえば「蕪碧池を六尺通り埋める事に内意を窺う」（宝暦四年（1754）二月一八日条文）とあり、池面積がかなり縮小されたと思われる。

龍王殿再建の事業全体は、再建の儀式から完成までおよそ五年を要しているが、その中でも建築物の施工に入る以前に土木工事と思われる工程におよそ二年を費やしている点が注目される。二年間の工程の中には、例えば「新掘石垣築始崩石を以両側十間余」（宝暦四年三月二八日条文）、「本石二而宝珠庵下より築始」（同年四月十九日条文）、「石屋築キ掛」（同年五月二一日条文）、「新掘石垣萱人足にて茅を以編之」（同年十一月条文）の項目がみられる。これらの記述から、一連の「石積み補助工作」^{註40)}の経緯を断片的に窺い知ることができる。すなわち、最初に石垣の基礎となる「根石」を据える。この時、根代に泥土や砂礫があれば取り除き、根水（地下水）の水口があれば水筋を切り替える。こうした「床ざらえ」を終えた後に「地掘り」を行う。また、「石垣萱人足にて茅を以編之」の項目は、地すべりを防ぐために「床固め」^{註41)}を行っている様子であると推察される。他所の記述に、「大雨池ノ西方土手石垣共に二三間余崩」（同年八月二八日条文）、「寺中人足両人例ノ崩石ヲ出」「七日大雨又石垣六間程崩」（同年九月二日条文）、「石匠ヲ入人足ヲ入掘土手崩築了」（同年九月二四日条文）などがあり、雨水のために石垣が一夜のうちに崩壊してしまうという災害に対して幾度となく対処していた様子が窺える。

5.3 江戸時代の造園技術

前項の「新掘石垣萱人足にて茅を以編之」という記述に関しては、茅を使って石垣の裏を根固めをしているものと解釈したが、同様の事例は、江戸城普請の工程中に確認することができ^{註42)}、築城技術を応用しているとするならば興味深い一例であろう。

江戸時代、徳川家康によって政治の中心は江戸に定められた。そして参勤交代の制を受け、諸侯たちが相次いで江戸に下屋敷を構えたことにより、江戸市内にはいわゆる大名庭園と呼ばれる広大な庭園が続々と出現した。そして、大名階級や裕福な町人の擁護により、江戸は一大庭園都市となった。さらに、出版文化の旺盛により、各地の名園の見聞録や作庭秘伝書^{註43)}の類の書物が広く普及した。江戸時代は、室町時代に枯山水が発展したり、桃山時代に茶庭が発生したような様式的発展はなかったが、特権階級以外にも広く庭園文化が浸透したことがこの時代の特徴と言える。そこで、庭園史の上では「独創性のない時代」あるいは「復興の時代」との位置付けがなされる^{註44)}。

建長寺の庭園整備においては、蕪碧池を縮小し、方丈に付随する小規模な池泉へと改造が行われたが、このような大規模な造成の背景には、近世の石積技術および、

作庭技術を含めた庭園情報が豊富にあったものと考えられる。

6. 考察

従来の鎌倉庭園に関する見解は、例えば「戦国時代であり、庭園などに進歩を見せる世相ではなかった。」^{註45)}、「留学僧らによって中国から禅文化が持ち込まれたが、庭園との関連ということになると、ほとんど事跡はなかった」^{註46)}といった記述に見られるように、消極的な評価が多かった。確かに、鎌倉時代の禅宗庭園自体は、まだ禅宗の導入期であったことから、従来の浄土式庭園に匹敵するほどの存在感はなく、作庭技術にも見るべきものはほとんどない。しかし、本論文でも明らかにされたように、鎌倉時代の庭園はその後の造園技術の基礎となるいくつかの重要な概念が導入されたものと考えられる。ことに、鎌倉時代にもたらされた「禅宗思想の定着」と「武士階級の抬頭」は、その後に禅宗庭園の発達にとって重要な要因になったと考えられる。また、鎌倉特有とも言える「谷戸の発達した地形」は、縦列に構成される禅宗寺院の伽藍配置に適したものであり、ここに鎌倉の自然条件と禅宗思想が一体化することによって新たな庭園様式を生み出すきっかけが与えられた。

ここで、鎌倉における寺院および庭園の発達をもう一度整理すると、最初に行われた大規模な造園工事は、鶴岡八幡宮（治承四年（1180）創建）の造営にともなうもので、宮前の苑池は広大で浄土式庭園に匹敵するものであった。長勝寿院（文治元年（1185）創建）については、庭園の存在は確認されていないが、谷戸に占地した最初の寺院となった。永福寺（建久三年（1192）創建）は、源頼朝が奥州遠征の際に見た平泉文化の栄華を再現したものであったが、鎌倉の地で実現された浄土式庭園は、谷戸という地理的制約を受けたため、細長い苑池を設けることによって解決した。以上が源頼朝によって造営された三大社寺で、庭園を含むこれらの造営にあたっては頼朝の意向が大きな影響を及ぼしていた。建長寺（建長五年（1253）創建）の庭園は、禅宗伽藍の後方に私的空間として計画されたが、その設計思想は禅宗の教義そのものとは関係なく、自由な造形をとることが許された。室町時代に入ってから造られた報恩寺（応安四年（1371）創建）の庭園は、方丈建築に付属する比較的小規模な庭園であり、自然の情景を表現した簡素なものであったと思われるが、建長寺と共に、方丈建築に付随する庭園という意味で、後の禅宗寺院における庭園形態の原点ともなった。

建長寺は、中心部に禅宗の伽藍様式を採用しながらも、最奥部には、やはり同時代の中国において、文人などの上層階級のための私有庭園として発達した園林の光景が同時に存在することとなった。そこには、最奥部の私的空間を豊かにしたいという意識が感じられるが、北面に

住居部分など私的空間を位置づける構成は、当時における建築空間に共通して見られる。

従来の建築史研究において指摘されているように^{註47)}、中世における武士階級の抬頭は建屋機能に大きな変化をもたらした。儀式機能の衰退、対面機能の重視という機能の変化に由来して、一つの建物の中において、公的な空間は南面、私的な空間は北面に位置づけられるという空間の分節が始まった^{註48)}。建長寺庭園は、このような建築空間を支配する相関性あるいは序列の概念が、初めて庭においても適用された事例であったと考えられる。そして、庭園を造った目的は、主に客殿など住居として使われた私的建物から間近に庭を觀賞する事であったと思われる。また、谷地という制約条件から、限られた空間を生かして作庭する設計思想が生まれたものと思われる。その後に京都で発達した、枯山水庭園と呼ばれる自然を抽象化した禅宗庭園があるが、その発祥の要因の一つに挙げられるのが、建長寺と同じく、限られた空間を生かした庭園の必要性である。建長寺において試行された庭園の小規模化の概念が、後の室町庭園における抽象的手法に結び付いたであろうことが想像される。当時の鎌倉に伝統文化に対する呪縛がなかったからこそ、主流であった浄土式庭園にとらわれない新様式が、鎌倉という都市空間の中で、胚胎される事となったと言える。

本論文では、鎌倉時代を中心に、鎌倉における社寺とその庭園を概観した。その初期の段階では、広大な苑池を造る平安時代の庭園様式の影響を引きずっているものの、建長寺において、それまでの庭園様式にとらわれない新しい形態が生まれたと言える。残念ながら、鎌倉庭園は鎌倉幕府の滅亡とともに失われてしまうが、武家社会と禅宗思想は、室町時代以降、より庭園と強く結びつくこととなり、京都においてさらに洗練された芸術文化として昇華されることになるのである。

7. まとめ

本論文では、中世の鎌倉地方に造営された五つの社寺における庭園を概観し、庭園史における鎌倉庭園の位置付けを試みた。その結果、鎌倉庭園は、「禅宗の導入」「武士階級の抬頭」「谷戸地形」という三要素の中で醸成されたことが明らかとなった。このような環境を持つ地に庭園文化を移入したことは、庭園史上に新しい様式を生み出す大きな転機を与え、従来の浄土式庭園にとらわれない自由な造形を可能にしたと言える。また、建長寺庭園の作庭において、「自然の抽象化」という室町時代後期の京都庭園の主流をなす思想が生み出された可能性を指摘した。すなわち、枯山水に代表されるような、意匠的主題が禅的であると評される室町庭園の発生の起源を推察した。実際の作庭方法において禅的手法が具体化される以前に、庭に対してそのような設計思想の萌芽があったことを指摘し、その時期を建長寺の作庭期にあ

るとの結論を導いた。しかし、鎌倉庭園の具体的な姿については今なお不明確な点が多く、今後の発掘調査や文献調査を通して明らかにすべき点が多い。例えば、建長寺では本論文でも明らかとされたように、江戸時代に再整備された姿であり、今日残されている庭園によって鎌倉庭園を論じることは極めて困難である。

また、鎌倉庭園の思想が、その後の日本庭園史にどのように継承されたのかを具体的に明らかにすることも今後の課題のひとつであり、京都五山や山梨県を中心とした禅宗の地方波及の影響などを加えた分析を行いたいと考える。

本文注

- 1) 創建当時の様子を知る史料として、本論では『吾妻鏡』『空華日用工夫略集』などの、鎌倉五山文学、高名人物の日記の中から、造営工事に関する記述を中心に取上げた。
- 2) 代表的な研究成果として、文献 18、文献 19 などがある。
- 3) 文献 24 による。
- 4) 文献 12 によれば、石と言うよりは塊状の土に近く軟質である。褐色凝灰岩質砂岩。別名「土丹石」「土丹岩」と呼ばれる。湘南地方に産出するもので鎌倉では土留など土木用に用いられ、時には庭のなかに塊状に積まれて丘をなすこともある。また板状に切って敷石とすることもあ。これには四種類あるが、主として地元に使うのみである。
- 5) 文献 23, p.18 によれば、山肌を切り落として人工的に切り立った崖を造成し、敵の登攀攻撃を妨げる施設のこと。中でも名越の大切岸などがある。有名であり、その規模は高さ 10m、長さ 800m に及ぶ。
- 6) 文献 23, p.18 によれば、尾根を横に深く断ち切って敵の尾根上の動きを阻む施設のこと。
- 7) 文献 27, p.131 による。
- 8) 『吾妻鏡』によると、元仁元年（1224）に行われた四角四境祭は、東は六浦、南は小坪、西は稲村ヶ崎、北は山内で行われた。
- 9) 文献 23, p.116 による。なお同書によれば、建長寺もかつての刑場跡に創建されたと伝えられている。
- 10) 文献 23, p.27 による。
- 11) 『円覚寺境内絵図』による。この絵図の作成時期は建武元年（1334）頃と推定され、鎌倉幕府滅亡（元弘三年（1333））直後の鎌倉の北西部の入口近辺の状態を知る貴重な絵図である。山内道路と瓜ヶ谷の交差点に「簀屋跡」の注記がみられ、幕府の御家人が警護にあたったことがわかる。
- 12) 文献 25, p.21 による。
- 13) 文献 25, p.21 によれば、『吾妻鏡』中の地名呼称に、市街中枢部では「若宮大路東頼」というような道を基準とした表記が見られる。それに対し、それより外方では「大倉——」「甘縄——」と地域名で表記している。
- 14) 文献 5 の昭和三五年刊行の報告によれば、盛時の鎌倉には各宗含めて数百の寺院があったとされる。廃寺となったもののうち、禅宗においては 55 ケ寺、諸宗 175 ケ寺の名称と場所が報告されている。
- 15) 文献 18 の中において指摘される。
- 16) 文献 7 によれば、禅宗伽藍の祖形は、南宋時代（1127-1279）の中国浙江省における五山建築にあり、万寿寺の規模を模したものであると近年の研究により指摘されている。建築史研究の成果を参照すると、禅宗様式の祖形は南宋末より元にかけての十三世紀における浙江省と江蘇省南部の中国建築に近い。この地域は南宋の都臨安（杭州）を中心に分布した中国五山の所在地と一致し、禅僧の交流をあわせ考えると、ここに禅宗様式の直接の祖形は浙江省を中心に分布した十三世紀の五山建築に求められる。
- 17) 文献 28 による。
- 18) 文献 9 によれば、『空華日用工夫略集』は、鎌倉五山の中心人物であった義堂周信（1325-88）の六四年間におよぶ日記である。政治を論じ、仏教・文学・社会などあらゆる分野にわたって彼の思想が述べられている。当時の五山文化の具体的な姿を伝える記録として貴重である。
- 19) 「石切」の存在とその意義については、文献 18 において注目され

ている。その中で、「石切」が境内の整備に使われた様子を史料で確認することができるのは、称名寺（1260 年頃）三代目金沢貞顕の時代の境内および苑池整備であるとしている（武将書状編『金沢文庫古文書』）。また、文献 12 の p.126 の説明によれば、「石切」の意味とは、石山から石材を切り取ること。また石材に加工すること。さらにそれらを築とするもの、石工であるとされる。

20) 文献 13 による。

21) 文献 1 によれば「大御堂（長勝寿院の通称）と聞ゆるは石叢のきびしきをきりて道場の新なるを開きしより（以下略）」とある。

22) 壁画は阿弥陀如来の浄土図であったという。また供養の際に必要な施物や御堂の荘厳具を京都に出向いて買調えている。

23) 文献 17 によれば、おそらくモデルは法勝寺であると推察され、頼朝の墓のところにあった法華堂の瓦の中から、法勝寺のものと同じ型で焼いたものと思われる瓦が発見された。頼朝はかなり法勝寺にあこがれをもって鎌倉の寺院を造営していたのではないかと考えられる。

24) 昭和四一年（1966）に国指定史跡となり、昭和五八年（1983）以降、本格的発掘調査が連続して行われた。三堂のうち、阿弥陀堂と薬師堂はほぼ同規模で正面五間（16.5m）奥行四間（12.6m）と推定される。また、三堂とも正面に階段が敷設されていた。

25) 文献 24 による。

26) 文献 22 による。

27) 園林とは、宋代の中国第一の文化都市であった蘇州の地につくられた文人のための庭である。この庭の特徴は、「園遊」すなわち、庭の景勝から作者の心を読み取るという觀賞法である。これら文人の庭は、「陰遁思想」を表現し、庭主自体が造作に参加するものであった。その歴史的意義は、従来の伝統的作法から大きく脱胎した「創造芸術による庭づくり」のはじまりであるとされる。

28) 文献 26 によれば、『空華集』は、鎌倉五山の中心人物であった義堂周信（1325-88）の全二十巻からなる詩文集である。円覚・瑞泉・黄梅・報恩寺などで詠じた七言絶句などを含む。特に、廃絶した報恩寺に関する記述が注目される。本書は『空華日用工夫略集』とならんで、五山禅僧の思想を伝える史料として貴重である。

29) 文献 2 による。

30) 文献 7 による。

31) 文献 9 による。

32) 鎌倉時代後期の臨濟禅僧。五山文学の第一人者、空華道人と号し、詩文集『空華集』および『空華日用工夫略集』の作者として高名である。夢窓国師に参じており、師と同様に愛庭家であり多くの庭園に接した人物でもある。のちに瑞泉寺の住持を兼ねた。

33) 文献 3 による。

34) 文献 15 による。

35) 文献 10 による。

36) 文献 25, p.87 によれば、鶴岡八幡宮の発掘区内で、中世に造成された土丹斜面において出土したもの。大きさは直径 60cm で、割いた竹を六角目になるように編み、ザルの縁に竹縄を付け、担ぎ棒に下げて使用したと考えられる。

37) 文献 15 による。

38) 文献 29, p.223（表-1）に詳述。

39) 文献 29, p.223（表-2）に詳述。

40) 文献 5 による。

41) 文献 6 によれば、石垣の居床となる地盤のこと。

42) 文献 6, p.89 によれば、江戸城の普請に際して、普請半ばに石垣が崩壊して死者を出し、その再築にも手を焼いたことが知られる。しかし例外的に加藤清正が担当した丁場は崩壊しなかったという。それは次のような入念な工作がなされたからであるという（「明良洪範」より）。

「加藤家では森本義大夫なる者に奉行させたが、彼は諸人の笑うのも意に介さず、武蔵野の萱を刈り取って根代に入れ、その上で多数の子供を遊ばせ、いとも悠長にやったが石垣は崩れなかった。」

43) 造園書には、日本最古の庭園書である作庭記（1289）をはじめとして、『山水並野形図』（1466）、『庭石立様法』（1680）、『築山庭造書』（1735）などがあり、現在はおよそ 30 種類が確認されている。

44) 文献 14, p.13 による。

45) 文献 14, p.12 によれば、この時代を庭園史の上では暗黒時代と呼ぶ。宋から入ってきた禅宗文化の思想は、庭園には形をなして表面に現れず、次の室町時代（1335～1573）の潜勢力をなした時期であると位置づけている。

46) 文献 21 による。

47) 文献 8 による。

48) 対面機能・寄り合い機能・儀式機能をみやす南面の公的な空間に対して、北面は武家住居として日常生活をみやす私的な空間の構成へと変わっていった。

参考文献

- 1) 『東関紀行』(1242)
- 2) 重森三玲『日本庭園史図鑑』第24号,有光社,p.43,(1936)
- 3) 鎌倉市史編纂委員会『鎌倉市史』史料編,鎌倉市,(1937)
- 4) 関靖『金沢文庫古文書』武将書状編,幽学社,(1959)
- 5) 川副武胤『鎌倉の廃寺』鎌倉国宝館論集第四集,鎌倉市教育委員会,(1960)、同じく第六集,(1962)
- 6) 田淵実夫『日本の石垣』朝日テレビニュース社出版部,p.88,(1967)
- 7) 神奈川県教育庁指導部文化財保護課『神奈川県文化財図鑑・建造物篇』神奈川県教育委員会,p.26,(1971)
- 8) 日本建築史基礎資料集成16『書院Ⅰ』創元社,(1971)
- 9) 白井永二『鎌倉事典』東京堂出版,p.99,(1976)
- 10) 鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』昭和46年度-52年度,p.123,(1977)
- 11) 貴志正造『全譯吾妻鏡』第1巻〜3巻,新人物往来社,(1977)
- 12) 上原敬二『岩石・庭石・石組方法』庭園入門講座第七巻,加島書店,p.67,(1978)
- 13) 森蘊『公家・武將の庭』太陽庭と家シリーズⅠ,平凡社,p.56,(1980)
- 14) 上原敬二『日本式庭園・各種庭園』庭園入門講座第十巻,加島書店,p.12,(1980)
- 15) 蔭木英雄『訓注空華日用工夫略集』思文閣,(1982)
- 16) 長谷川正海『日本庭園雑考一庭園と思想一』東洋文化社,(1983)
- 17) 大三輪龍彦『中世鎌倉の発掘』有隣堂,p.18,(1983)
- 18) 網島淳“鎌倉の中世寺院境内環境と石切について”日本建築学会大会学術講演梗概集(関東),p.2617,(1984)
- 19) 櫻井敏雄“建長寺伽藍の設計計画について”日本建築学会計画系論文報告集第350号,p.95,(1985)
- 20) 大三輪龍彦“中世都市鎌倉の地割制一試論”仏教芸術164号,p.14-22,(1986)
- 21) 吉河功『禅寺の庭』グラフィック社,p.122,(1991)
- 22) 吉河功『日本庭園人物誌』日本庭園研究会出版部,p.42,(1993)
- 23) 松尾剛次『中世都市鎌倉の風景』吉川弘文館,(1993)
- 24) 網野善彦『中世都市鎌倉を掘る』日本エディタースクール出版部,p.4,(1994)
- 25) 河野真知郎『中世都市鎌倉』講談社,p.104,(1995)
- 26) 鎌倉市教育委員会『鎌倉の発掘10』新人物往来社,p.88,(1996)
- 27) 奥富敬之『鎌倉史跡事典』新人物往来社,(1997)
- 28) 鎌倉市教育委員会『亀ヶ谷坂周辺詳細分布調査報告書』,(1998)
- 29) 石原(三浦)彩子“鎌倉地方の史的庭園における築造技術に関する研究ー建長寺方丈庭園の変遷についてー”第20回土木史研究,(2000)

なお、本論文に掲載した地形図は、国土地理院「一万分の一地形図／鎌倉」(1986)の原図に加筆・修正を行ったものであり、[図-2] [図-3] [図-4] [図-5] [図-7] はすべて同一の縮尺となるようにした。

また、方位は[図-5]を除いて北を上として統一した。